

まえがき

世紀を越えてからの20年ほどの間にアジア経済は大きく変貌した。1997年のアジア金融危機の後遺症とともに始まった21世紀のASEAN経済も、輸出主導型の成長経路を回復して、先行諸国では「中進国」と呼ばれる新興経済の一角を担うに至った。危機の震源となった金融部門も、2000年代には経済全般の回復のなかで徐々に安定を取り戻した。2010年代に入ると健全性規制の強化、大規模化やグローバル展開といった金融業の世界的なトレンドやアジア経済の拡大と域内化に対応して、変容しながら外向きの動きを強めてきた。

先行ASEAN諸国の金融システムへの関心は、日本国内でも世界的にもアジア金融危機をきっかけに突発的に高まり、1990年代終わりからしばらくは関連の研究が活況を呈した。そのなかで商業銀行セクターに関わるものは、不良債権問題や破綻処理とセクターの再編についての関心を背景に、実務的な観点からの調査研究が多かった。それゆえに、2000年代半ば以降商業銀行が安定を取り戻すと、このセクターへの関心は退潮していったように思える。米国を震源とする2008年の世界金融危機が世界を襲ったときには、すでにASEANの金融システムは安定を取り戻しており、結果的には意外なほどに動揺が少なかった。

ASEANウォッチャーにとってASEANの商業銀行セクターの次の段階の変容が感じられるようになったのは、この世界金融危機の後からである。ASEAN経済全体の拡張や域内化にともなって、同族経営や政府出資、国内の非製造業への傾斜などに特徴づけられた伝統的な商業銀行が大きく変貌しつつあるのではないかと。そうだとすれば、それはこの地域の経済発展や金融発展の経路とどのように関係しているのか。そして、2015年のASEAN経済共同体の発足をきっかけに、それがより顕在化してくるのかどうか。本書のもとになる研究会を始めた動機はこうしたところにあった。

本書は、日本貿易振興機構アジア経済研究所で2017～2018年度に実施された「東南アジアにおける商業銀行部門の変容と現状」研究会の成果である。この研究会では地域横断的な金融の動きと、3カ国の商業銀行セクターの実態の変化という2種類の観察を、7人のメンバーが分担して進めてきた。また、この研究会に先立つ助走段階では、京都大学東南アジア地域研究研究所・東南アジア研究の国際共同研究拠点（IPCR）の「東南アジアにおける商業銀行セクターの地域横断的大変容の実態把握」研究会で、より広い観点から情報収集を行った。これらの研究会にメンバーや外部講師として参加された、牛山隆一（日本経済研究センター）、小西鉄（福岡女子大学）、スワンナチョート・チャクリット（カシコン銀行）、長岡慎介（京都大学）、藤田哲雄（日本総研）、矢野剛（京都大学）、吉田悦章（国際協力銀行）の各氏をはじめとする多くの方々には感謝申し上げる。本書はまた、研究会における2回の現地調査で対応いただいたの方々にも多くを負っている。

研究からみえてきた結論としては、商業銀行セクターの大きな変化には、ASEANの経済発展や金融発展の経路との大きな断絶や、逆に固有構造への回帰があるというよりは、この地域の商業銀行が歴史固有の構造を残しながらも、世界的な銀行業の変容に対応し、それを緩やかに変容させようと努力して、身の丈に合った国際化を進めつつある、ということである。

タイやインドネシアでは外国資本の参入規制が緩和され、日系銀行を含む外国銀行の重層的な進出が進んでいる。バーゼル型の自己資本規制への対応として、ほとんどの国で規模の拡大が志向され、上位銀行による寡占化が強まっている。そうしたなかで、有力同族銀行は海外資本との提携を追求し、他方、政府出資銀行は再編のなかで膨張してきた。最近になって、そのような有力銀行の中から域内全体に業務を展開して存在感を示す「ASEAN」銀行が登場しつつある。その一方で、業務面では伝統的な貸出業務に収益を依存する業務構造に変化はみられず、しかも製造業への貸出比率は低下し、国内非製造業や消費部門への傾斜が進むなど、意外なほど変化に乏しい。

ASEANでも商業銀行を越えた金融業の変化が早い。一部の国ではイスラム金融が広がりを見せている。広義のフィンテックというべき、携帯情報端末を利用した銀行口座を経由しない決済や信用のサービスも存在感を示しつつある。マイクロファイナンスなどの金融包摂の課題への取組みもこうした金融業の変化と影響し合いながらさらに展開しつつある。

本書は、こうした金融業全体の変容の重大さを理解しながらも、しかしあえて正面にはとりあげずに、商業銀行セクターの業容変化に分析の焦点を絞ることにした。ASEANの金融システムの動きを、今世紀の20年という中期的な観点から、そしてアジア金融危機における商業銀行の大規模な再編からの継続性にこだわって、一旦総括することに重点を置いたからである。これから予感される金融システムの大きな変容を理解するために、この本が実務家、学生、研究者の道しるべになればと思う。

編者